

目的 食の禁忌がほとんど消滅した感がある現在の日本人にとっては、鶏の卵やその肉は最も普通に食べられる食品の一つである。しかしこれらの食品は、長いあいだ日本人が食べることを忌避してきた食品である。人が食物を食べ物として受容する、あるいは忌避するのはどのような理由によるのであろうか。鶏肉が、忌避される食品から受容される食品へと向かう過程を追うことによって、その背景を検討することを試みた。

方法 鶏肉が食べられてきた過程については、江戸期の「料理物語」「料理綱目調味抄」などの料理本を中心に、明治期の「食道楽」等を資料として、鶏肉の出現頻度や料理の種類、食べ物としての意義等について検討した。一方、鶏肉を忌避してきた事実や背景については、江戸期の料理本のほか天武紀4年の「肉食禁止令」をはじめとして「建内記」「秋山紀行」等の諸書からその間の事情を汲みとると同時に、「日本大王国誌」「ザビエル書翰抄」「日本教会史」などの外国人による記録から検討することにした。

結果 鶏肉が食べられてきた具体例としては「料理物語」以後種々の料理に使われており、また病人食に有効な食べ物として扱う例も少なからずみられた。食べることを忌避することに関しては、日本側の資料では、暁を告げるあるいは闇を閉じる時告鳥として位置づけられることから、食べることが憚られたと専ら理解されるのにたいして、外国人の資料では、日本人は、自分等が飼育するものを食べないと指摘しており、おそらくその両面によったものであろうと考えられた。また忌避が解かれることについては、明治期における文明開化の影響が大きく作用したものと推察された。